# QOLサポーター新潟

No.21

新潟医療福祉大学
2010年1月8日発行
新潟医療福祉大学広報委員会編集

10月3日(土)・4日(日)、本学にて伍桃祭（大学祭）が行われました。今年のテーマは、「SMILE～笑う門には福来たる～」。当日は学内外から約1,200名もの方にご来場いただき、さわやかな秋晴れの下、キャンパスのいたるところで多くの笑顔が見られる大変賑やかなイベントとなりました。

●学長対談
●くらしサイエンス
・インフルエンザ予防策について
●院生研究紹介
・身体活動が骨格筋の血糖取り込みに果たす役割
・認知症における行動心理学的症状（BPSD）の直接観察式評価用紙の開発;信頼性と妥当性の検討
●「第9回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告
●総合ゼミ紹介
・中高年者のメタボリックシンドロームの予防・改善を図る
・高齢者の糖尿病
・ウィルソン病に伴う摂食・嚥下障害患者の社会復帰をめざして
・合併症を持つ在宅認知症患者と家族の生活をチームとして支援するためのマネジメントを考える
・高齢者の骨折の治療、再骨折予防と生活支援
・地域の中で生きがいや希望のある生活
●学外実習体験記
理学療法学科／作業療法学科／言語聴覚学科
義肢装具自立支援学科／健康栄養学科
健康スポーツ学科／看護学科／社会福祉学科
●部活動紹介「強化部戦績紹介」
サッカー部／男女バスケットボール部／水泳部／陸上競技部
●CAMPUS NEWS
●伍桃祭を終えて
●受験生のみなさんへ

# 今回は、本学における就職状況と今後の課題・展望などについて、髙橋学長と藤巻就職センター長、中町キャリア開発室長にお話していただきました。

新潟医療福祉大学
学長
**髙 橋 榮 明**

新潟医療福祉大学 就職センター長
健康スポーツ学科 准教授
**藤 巻 健 一**

新潟医療福祉大学
キャリア開発室長
**中 町 礼 子**

## 本学の就職支援体制について

**藤巻**　本学における就職支援体制は、教員が中心の就職委員会と、専門スタッフが中心のキャリア開発室で、就職支援センターが構成されています。就職委員会の主な業務は、就職指導関係企画の立案、就職情報の収集・提供、就職指導の連絡調整など。先生方への就職活動に向けてのアドバイスや就職活動の依頼なども重要な仕事です。それを受けてキャリア開発室では、個々の学生に対する業務や対外的な折衝業務、たとえば求人情報の集約や配信、学生への全体的な就職指導や就職ガイダンス、個別の就職指導などを行っています。

**中町**　藤巻先生がおっしゃったように、就職指導・相談については先生方・スタッフともに対応していますので、学生さんは基本的に、先生方か就職センターのどちらにでも相談できるようになっています。また、我々としては先生方と連絡を密にして、就職に取り残される学生がいないようにと考えています。

**学長**　社会で活躍する人材を育成するためにも、就職センターの存在はとても重要です。学生は卒業後の姿を考えて4年間を過ごし、上手にこの体制を利用してほしいですね。

**中町**　ぜひそうしてもらいたいと思います。また、これまでも行ってきましたが、今後は、4年後どうありたいかしっかり考えられるよう、低学年からのキャリア形成にも力をいれていきたいと思っています。

**藤巻**　就職センター全体としても、一般企業は医療福祉職とちがって就職活動の時期が年々早まっているので、対策時期を前倒しにする方向です。

## 就職実績・現在の状況について

**中町**　就職実績は、昨年度、就職希望者数394名のうち、就職が決まった学生は391名。就職率99.2パーセントです。

**学長**　これだけの数字になるのは、やはり複雑化する社会保障制度や高齢化社会において、専門知識に加えチーム医療を学んできた本学卒業生が注目されている証拠ではないでしょうか。

**中町**　そうですね。また本学の学生は、やさしい、粘り強いなど、対外的に受けが良い学生さんが多いので、あとは自分で「どう働きたいか」、「将来どのようになりたいか」といったことを、自分の言葉で伝えられるかどうかが今後も鍵になると思います。

**藤巻**　現在の状況は、今年初の卒業生を出す看護学科が100%に近い内定率で、他は昨年度以上になるよう現在指導を強化しています。学生への個別指導は、失敗したときに精神的に弱い学生をどうケアしていくかも大事なので、特に教員は個々の状況にあわせ、生活指導も含めたバックアップもしていかなければと思っています。

**学長**　ぜひお願いします。医療福祉分野では介護保険制度の設立により、介護老人保健施設や特別養護老人ホームなど、従来なかった病院以外の職場が増えたので、今後は学生にそういった職場での仕事の重要性を伝えるべきですね。

## 今後の取り組みと就職を控えている学生へのメッセージ

**藤巻**　就職センター全体としての今後の課題は、全国的に就職活動の時期が早まっているのでとにかく就職対策の早期着手ですね。学生には自分の目標達成のためにも1・2年生からキャリアパスをしっかり持ち、4年間を過ごしてもらいたい。QOLサポーターを目指すには専門分野だけでは不十分。豊かな人間性も必要です。学生時代に付加価値を身につけ、色々な経験を積めば、厳しい社会でも人間的な生き方ができるのではないでしょうか。

**中町**　私も学生には、「就職はゴールでなく、スタート。10年後、20年後のあなたに期待されている」といつも言うのですが、貪欲に将来に役立つ資格などを取り、勉強のみならず、クラブ活動やボランティアなどに熱中して、充実した大学生活を送って欲しいですね。就職支援としましては、今年、本学の就職支援プログラムが文部科学省に採択されましたので、これを活用することで卒業生の情報を一元管理し、在学生にフィードバックする予定です。他にも低学年向け資格講座など様々な企画を計画中です。経済産業省も、「社会人基礎力」を大学で育成するように推進しており、その基本はアクション、シンキング、チームワーク。本学はチームワークについては力を注いでいるので、就職センターとしては今後アクションとシンキングの部分に関してもさらに強化していきたいですね。

**学長**　確かにチームワークという意味では本学では3学部8学科（H22年度は4学部9学科）のメリットを生かし、各学科間の連携教育を推進してチームワーク力を育んでいます。そこで大事なことは、1に課題の認識力、2に課題の調整力、3に対策の実践力。本学ではこの3段階で力をつけるカリキュラムを組んでいます。一般社会では、既に地域包括支援センターにおける医療と福祉の連携、または病院と地域の連携など、多くの場面で様々な専門職と連携しリーダーシップをとる人材が必要とされています。本学学生には在学中からチームワーク力・連携推進力をつけ、多様なニーズに応えられるQOLサポーターとなり、社会で大いに活躍してもらいたいと期待しています。

# インフルエンザ予防策について

看護学科 講師　長谷川 隆雄

## インフルエンザの流行

今年も冬の季節を迎え、インフルエンザの流行が心配な季節になってきました。インフルエンザは、インフルエンザウイルスを病原微生物とする気道感染症で、感染性、病原性の強さから集団発生に注意が必要な感染症のひとつです。例年の流行パターンは、11月下旬～12月上旬に発生がはじまり、翌年の4月～5月には終息するというものでした。しかし、今年は新型インフルエンザ（H1N1型）の発生に伴って、その様相は全く異なるものになっています。例年の終息期になって海外でその発生が報じられ、わが国では夏以降になって各地で集団発生が問題になるようになりました。

インフルエンザウイルスは抗原性に基づいてA型、B型、C型に分類されますが、主に流行をひき起こすのはA型とB型です。その中で、A型インフルエンザウイルスは突然、別の亜型に変異を繰り返すという性質を持っています。不連続抗原変異は数年から十数年単位で起こり、世界的な流行をひき起こすというのが、新型インフルエンザの発生が問題となるゆえんです。

## 感染経路と予防策

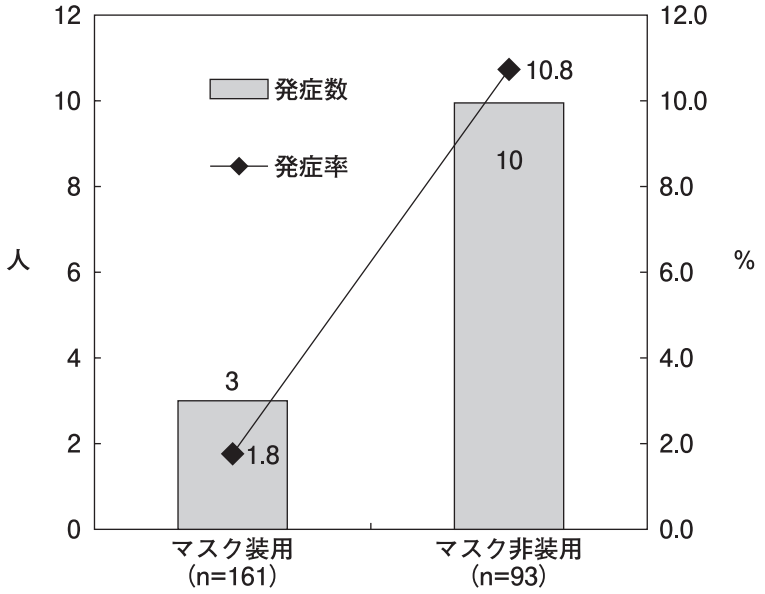
感染経路は咳などによる飛沫感染で、人から人へと感染することになります。潜伏期間は1日～5日で、発症後3日頃までが最も感染力が強いとされています。感染経路は新型インフルエンザウイルスも同様ですので、予防策も従来のインフルエンザ（季節型インフルエンザ）とまったく同じでよいということになります。ただ、新型インフルエンザの場合は、ほとんどの人が抗体を持っていないため、あっという間に感染が拡大するということであり、さらに予防策が重要になります。

これからは、新型インフルエンザと合わせて季節型インフルエンザの流行期とも重なるため、両方の予防策が必要になってきます。インフルエンザの予防策として最も効果があるとされているのは、ワクチンの接種です。日本臨床内科医会インフルエンザ研究班の報告（http//japha.umin.jp/jnfuenza/index05htm05#2）でもその有効性が示されており、特に若年者では感染のリスクが低下するとされています。また、ワクチンの接種はインフルエンザによる重篤な合併症を予防し、健康障害を最小限にとどめることが期待できます。インフルエンザワクチンは、接種後効果が表れるまでに2週間程度を要し、約5ヶ月間その効果が持続するとされていますので、ワクチン接種は流行シーズン前に行う必要があります。しかし現時点では、季節型インフルエンザワクチンも含めてその絶対量が不足していて、希望してもすべての人が接種できるとは限らないという問題があります。

日常的な予防策としては、米国疾病管理予防センター（CDC）がすべての感染症対策として推奨する標準予防策（スタンダード・プリコーション）というのがあります。これは、日ごろからの手洗いをはじめとする感染予防策の基本になるものです。さらに、感染経路が飛沫感染である呼吸器感染症予防策としては、「咳エチケット」の実施が重要であるとされていいます。その方法は、①咳をするときは口と鼻を覆う、②鼻汁や喀痰など気道分泌物で汚染されたティッシュペーパーを適切に廃棄する、③気道分泌物に触れた後の手洗いなど手指衛生（石けんやアルコール擦り込み製剤の使用）を行うなど、気道分泌物を封じ込め飛沫感染を防ぐための対策です。また、サージカルマスク（不織布性）も「咳をするときは口と鼻を覆う」という点から有効です。日本小児感染症学会ではマスクを着用することでインフルエンザの発症率が減少したという報告（図）が行われています。鼻、口、あごをすき間なく覆うなど正しく着用する（写真）ことが大切です。その他の予防策としては、インフルエンザウイルスは乾燥に強いウイルスですので、ウイルスの生存を阻止するために、湿度を50%以上に保つことが効果的であるとされています。

## 日ごろの健康管理

これから冬の季節を迎え、新型インフルエンザ、季節型インフルエンザともに本格的な流行期に入ることが予測されます。予防策として最も効果があるとされるワクチン接種が間に合わない状況の中、今シーズンをどうのり越えるかはすべての人々の課題です。先に述べた予防策とともに十分な睡眠と休息を確保し、バランスのとれた栄養を取るなど、日ごろからの健康管理を心がけたいものです。




http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/special/flu2007/pickup/200801より掲載

図 マスク着用のインフルエンザ予防効果

マスクの正しい着用法

# 院生研究紹介

## 身体活動が骨格筋の血糖取り込みに果たす役割

博士後期課程 医療福祉学専攻 2年　川﨑 絵美

健康栄養学分野の川中研究室では、運動および食事による健康の維持・増進を目的とした基礎研究を行っています。その中で私は、姿勢維持や歩行のような身体活動が骨格筋の血糖取り込みに果たす役割について研究しています。

身体には互いに連結しあい全体として身体の支えとなる骨格がありますが、その骨格を繋いで機能を与える筋肉を骨格筋と言います。その役割は多岐にわたり、スポーツ活動における「走る・跳ぶ・投げる」動作や「立つ・歩く」のような日常生活の身体活動動作を起こす他、外的な衝撃から内臓を保護する、熱を産みだして体温を保持するといった役割も担っています。

さらに骨格筋はヒト生体内において最大の血糖消費器官でもあり、血糖値の調節に重要な働きをしています。図1は、血糖を下げるホルモンであるインスリン作用の大きさを臓器別に調べた研究結果です。健常者では、糖の7割以上が骨格筋で利用されていることが分かります。そして糖尿病患者では全身の総利用量が健常者の半分になっており、その原因は骨格筋での利用率の低下によることが示されています。つまり、全身の糖利用率の低下は骨格筋に対するインスリン作用の低下（インスリン抵抗性）を引き金として生じるのです。そして、骨格筋に取り込まれずに行き場をなくした血糖は過剰に蓄積し糖尿病を発症させるのです。したがって、生体内において骨格筋は糖尿病から私たちを守るもっとも強力な器官であると言えます。

ところで、テレビの視聴時間が長い人ほど糖尿病になりやすいという報告があります。つまり「動かない」ことが糖尿病を引き起こすのです。これは、「立つ・歩く」といった日常生活の身体活動が骨格筋の血糖取り込みに大きく貢献していることを示唆しています。では、「立つ・歩く」といった身体活動はどのような仕組みで骨格筋の血糖取り込みを調節しているのか。その点については必ずしも明らかではありません。少なくとも実験動物を用いた私の研究では、骨格筋を「動かない」状態にすることでインスリン抵抗性が生じる仕組みは、運動がインスリン感受性を上昇させる仕組みと共通ではない可能性が示されています。「動かない」ことが骨格筋の血糖取り込みを低下させる仕組みを明らかにすることで、日常的な身体活動の科学的な意義を確立することが現在の私の研究目標です。

運動や食事が身体を変化させる現象に興味があり、その仕組みを追究してみたい方、ぜひ一度見学に来てください。

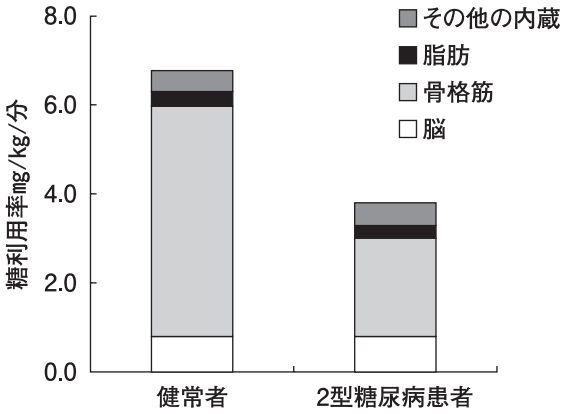



図 糖尿病に関するインスリン作用の各臓器別の比較

DeFronzo,1988のデータより改変

## 認知症における行動心理学的症状の
（Behavioral and psychological symptoms of dementia : BPSD）
## 直接観察式評価用紙の開発;信頼性と妥当性の検討

修士課程 保健学専攻 言語聴覚分野 2年　北村 葉子

言語聴覚分野の今村ゼミでは博士課程1名、修士課程2名、4年生6名、3年生8名の学生が在籍しています。このゼミでは、在宅生活を送っている認知症患者を対象とした研究を行っています。

認知症患者にみられる感覚、思考内容、気分、行動などにおける症状は、認知機能から独立した症状として行動心理学的症状（Behavioral and psychological symptoms of dementia: BPSD）という用語が提唱されています。現在、医療機関で使われている精神症状の評価方法Neuropsychiatric Inventory（NPI）日本語版は、家族、介護者に直接インタビューをするものです。NPIでは項目数が多く時間を要すことや、職種による用語の捉え方の問題点などがあり、直接観察式評価用紙として使用することは想定されていません。現在発表されている他の評価法にもいくつかの改善すべき点があります。個別のBPSDごとに下位項目を含んだ施設職員用の直接観察式評価法があれば、臨床上の有用性は高いと考えられます。

今回私たちは、認知症患者を直接観察する様々な職種がBPSDを適切に評価できる手段を確立することを目的として、8つの主項目と、その下位項目からなる質問紙であるBPSD Assessment scale（BPSD-AS）の試案を作成し信頼性と妥当性を検証し、その結果は今年度の日本高次脳機能障害学会でも発表しました。

この研究はBPSD-ASの最終版を通所、入所施設の利用者の初期評価や、ケアプランの会議での評価用紙として活用できるものにすることを最終目標としています。また、施設職員がBPSDを観察する視点の教育にも有用なものにすることも想定しています。

このように患者の認知機能障害だけでなく、実際の症例の経過や、患者家族の支援方法など、専門医である今村先生の臨床のもと幅広い指導を受けることが可能です。言語聴覚士が地域リハに貢献するためには、認知機能障害をはじめとする患者さんの障害を適切にアセスメントして、現場で一緒に働く他職種にその評価の視点を理解してもらうことが重要です。また、地域リハにはケアマネジメントの考え方が欠かせませんが、大学院に入ってさまざまな医療・福祉職の社会人の方々に出会い、病院で勤務していた頃よりも視野が広がったと思います。指導を受けながら学会や症例検討会などに参加することや、最新の研究や今後の研究課題などを知ることで臨床がより興味深いものになると思います。

# 「第9回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告

第9回学術集会 広報担当 相田 陽子
（作業療法学科 助手）

## ❶学術集会のテーマ

新潟医療福祉学会は、平成13年の発足以来、健康・医療・福祉分野との連携、共同研究の発展のために、毎年学術集会を開催しています。平成21年度は本学作業療法学科の大山峰生学科長を大会長として準備をすすめ、10月31日、第9回学術集会が本学を会場に開催されました。今回はテーマを「医療関連職の未来」とし、めまぐるしく変化する社会情勢の中、医療関連職の社会的地位、働く環境、待遇等の問題点を踏まえ、医療関連職は将来に向けてどのように進むべきかについて考えることを狙いといたしました。

## ❷学術集会の様子

当日は、さわやかな晴天にも恵まれ、学会員を中心とした参加を得て、約160名の参加者により開催されました。

午前中の一般口述発表では、社会福祉系、健康科学系、連携教育系とセッションが分かれ、各分野の方からそれぞれ興味深い発表がありました。また、ポスター発表では、地域社会活動、教育、リハビリテーション、健康科学といった多方面にわたる分野のポスターが同一フロアーに貼られ、自分の関係する分野のみならず他分野の発表者のポスターもみることができ、フロアーでは活発な意見交換がなされていました。口述発表・ポスター発表、いずれの発表も、今後の日常の臨床・教育活動に役立つ、または、普段は触れることの少ない他分野の最新の情報を得る貴重な機会となりました。本学の大学院生による発表もあり、先生からの質問に熱心に答えている様子がみられました。

午後の特別講演では、大阪府議会議員であり、理学療法士の長野聖先生にお越しいただき、「医療関連職が果たすべき今日的課題」と題してご講演いただきました。医療関連職がより良い技術を国民に提供することと、自らの社会的地位を向上させることには密接な関係があること、そのためには行政だけでなく政治への働きかけが不可欠であることを、ご自身の活動を交えながら分かりやすくご説明いただきました。長野先生のご講演に続いては、「若手が語る医療関連職の将来像」と題するシンポジウムが、本学作業療法学科の貝淵正人先生を座長に行われました。理学療法士、看護師、管理栄養士、健康運動指導士、社会福祉士のシンポジストの方が、それぞれの分野を代表し、職種の現状の問題点、強み、そして今後の展望をお話されました。会場からは多数の質問が寄せられ、時間が足りなくなるほど充実した議論が行われていました。

長野先生　講演の様子

## ❸本学学生がスタッフとして参加

今回の学術集会には、本学作業療法学科の2年生がアルバイト・スタッフとして参加し、会場係・照明係・受付係・マイク係等、様々な業務に従事しました。はじめての業務に学生たちは少々戸惑いながらも、徐々に自信を持って取り組んでいました。「普段は聞けないいろいろな職種の人の話を聞くことができて良かった」と、仕事の合間に見聞きした発表にも興味を持ち、将来の職業への意欲も増したようでした。

## ❹さいごに

本学では、本学会が健康・医療・福祉分野の連携・発展、さらには共同研究の推進の場となること、また学生・大学院生の研鑽の場となるよう今後とも努力いたします。来年度は本学理学療法学科の大西秀明学科長が大会長となり、第10回学術集会を開催する予定です。来年度も多数の皆様のご参加をお待ち申し上げております。

最後になりましたが、ご協力いただきました各位には、紙面をお借りして心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

### プログラム

9:30～　学会会頭挨拶
　　学会長挨拶
9:45～　一般演題：口述セッション
11:30～　一般演題：ポスターセッション
13:30～　新潟医療福祉学会総会
14:00～　特別講演　大阪府議会議員 理学療法士 長野 聖 先生
　　「医療関連職が果たすべき今日的課題」
15:00～　シンポジウム「若手が語る医療関連職の将来像」
　　相馬 俊雄（新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科）
　　望月 紀子（健康科学部 看護学科）
　　北村　 紘（医療法人新光会 村上記念病院 栄養科 管理栄養士）
　　佐藤 敏郎（健康科学部 健康スポーツ学科）
　　三浦　 修（新潟青陵大学 看護福祉心理学部 福祉心理学科）
16:10　閉会

受付にて学生スタッフ奮闘中

ポスターを熱心にみている様子

# 平成21年度「総合ゼミ」発表会報告

「総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取組みのひとつである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講される講義で、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、チーム医療などについて実践的に学んでいきます。またゼミでは具体的な症例をもとに、関連する学科が混成でグループを形成し、グループワークを通じて対象者のQOL向上にむけた具体的な支援策について意見交換し、検討結果を発表します。

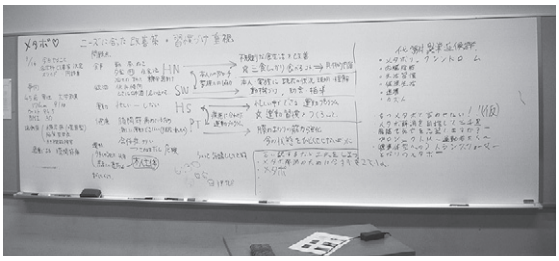
今回は9月18日㈮に行われた総合ゼミ発表会の様子をご紹介します。

## 中高年者のメタボリックシンドロームの予防・改善を図る　佐藤（敏）・松井・岩森ゼミ

このゼミでは「メタボリックシンドロームの対象者を分析し、専門家チームとしての評価に基づき、協力して対象者の支援策を考察する」ことを目標として、理学療法学科・健康栄養学科・健康スポーツ学科・社会福祉学科の4学科の学生が集まり、生活改善プランの作成を行いました。模擬対象者は、メタボリックシンドローム予備軍である本学教員であり、身体計測、体組成評価、体力測定、血液検査結果、生活習慣など実際の相談者情報をもとにして、生活改善プランを作成しました。特に身体計測、体組成・体力測定については、実際に学生自ら測定も行い、評価しました。その結果、社会福祉学科からは、対象者自身の病気の理解、問題意識が不十分なことが介入すべき点と判断し、このまま生活をするとどうなるのかを説明し、問題意識を呼びかけました。健康栄養学科は、欠食および脂質・糖分の過剰摂取を指摘し、改善策を提案しました。理学療法学科と健康スポーツ学科は具体的な運動プログラムを提案し、運動を行う時間がない場合のプログラムも作成しました。

各学科の専門性（用語、知識、認識）の理解が難しいようでしたが、用語集を作成し共通理解の努力をして、他職種を理解する、また他職種にわかりやすく自らの職種を理解してもらう工夫がなされました。今回のメタボリックシンドロームの予防・改善というテーマの下、複数の学科と課題に取り組み、連携の必要性を学んだようです。また、各学科の特徴を活かし協力することで、より良いアプローチにつながるという可能性を実感することができたようです。

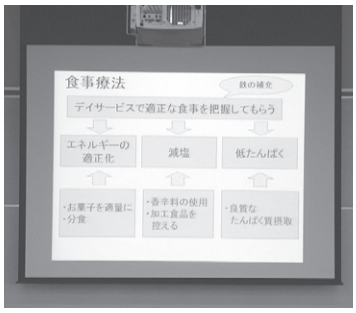
メンバー全員で発表


問題点の洗い出し

## 高齢者の糖尿病　渡邉（榮）・中山・山崎・渡辺ゼミ

平成18年厚生労働省国民健康・栄養調査より、糖尿病が強く疑われる人、糖尿病が否定できない人の推計は約1,870万人と年々増加の傾向にあります。また糖尿病患者は、内臓脂肪蓄積・肥満を基盤として、高血圧・脂質異常症を有しメタボリックシンドロームを併発する患者も多く認められ、医療コストの増加にもつながっています。本グループでは、医療・福祉の分野で支援が必要な理学療法・健康栄養・健康スポーツ・社会福祉の学科が連携して、この症例から考えられる患者支援策のキーワードは何かを学科ごとにまとめ、それを1つのテーブルで協議を進めていくうちに、学科間での情報が整理され、1つの目標に向かって支援策が立案されていくことが感じ取れました。さらに、治療効果を生むためには保健・医療・福祉の分野が知恵を出し合い、不足している情報を統一してまとめていくことの大切さを学んでくれたと思います。また、高齢化していく糖尿病患者に引きおこってくる糖尿病性網膜症、糖尿病性腎症などの合併症や認知症の対策についても専門職の立場から意見を交わしました。そしてより専門的な観点からの支援策をまとめることで、患者・家族へのアプローチに多職種業務に対する理解と、専門職間の連携作業が必須であることを学生達は実感できたようで、総合ゼミへの参加は保健・医療・福祉専門職として必要なスキル向上につながったと思います。

緊張の発表会



発表資料

## ウィルソン病に伴う摂食・嚥下障害患者の社会復帰をめざして　西尾・遠藤・金谷・渡邉（良）・真柄ゼミ

私が総合ゼミにかかわるようになり、4年目となった。本学に先駆的にカリキュラムに組み込まれたこのインタープロフェッショナル教育（IPE）は、ふりかえってみると、この4年の間に大きく成長したと痛感させられる。今回の摂食・嚥下班は、遠藤先生、金谷先生、渡邉（良）先生、真柄先生のご尽力により促進され、理学療法、作業療法、言語聴覚、健康栄養、社会福祉の5学科から構成される10名の学生たちの間に日を経るごとにチームが形成され、それぞれの専門性が発揮され、多領域の相互理解が深まり、連携が実践されているのを目のあたりにした。行き詰まりそうになった場面もあったが、KJ法を用いて各自の意見を整理したり、用語集を各自で作成して相互理解に役立てていた。演習室には、真剣に討議する声が、互いを信頼し合う笑顔があった。そして、学生たち自らの力で積極的に情報を収集し、問題を解決し、一人のクライアントの支援プランを立案にまでたどり着く過程の姿に頼もしいものを感じ、確信した。卒業後、彼らはよりよいQOLサポーターとして活躍するだろう、と。

発表会準備の様子

## 合併症を持つ在宅認知症患者と家族の生活をチームとして支援するためのマネジメントを考える

今村・松山・永井ゼミ

このゼミは理学療法、作業療法、言語聴覚、看護、健康栄養と社会福祉の6学科計12名の学生と教員3名（言語聴覚学科　今村徹、作業療法学科　永井洋一、社会福祉学科　松山茂樹）で活動しました。ゼミの取り組みは仮想症例やデータ症例の検討ではなく、大学の所在する新潟市北区に実際に居住されている、ある認知症の患者さんとご家族、そしてそれを支える医療・福祉の専門職のみなさんを対象としたフィールドワークでした。

学生はご本人の利用しているデイサービスセンターにうかがい、医療系専門職（作業療法士、言語聴覚士）と福祉系専門職（社会福祉士、介護福祉士）の皆さんにインタビューしました。また、ご本人を担当する家庭医である開業医の先生と専門病院の認知症専門医の先生にもそれぞれインタビューにうかがいました。これらの場で、学生は自分の学科の専門性を生かして情報を収集したあと、それらを整理し、ご本人とご家族を支えている地域での支援の現状をまとめる作業を行いました。そして次のステップとして、家庭での主介護者であるご本人の配偶者の方を大学にお招きして、家庭での介護と生活についてお話をうかがいました。最後にそれらすべてを踏まえて、このご本人とご家族への支援を分析し、提案をまとめました。

学生諸君にとって、このゼミの活動は想像していたものとはかなり違ったものだったと思います。現場の専門職の皆さんの生の声の厚みと重みに、最初はみなとまどっていたようです。しかし、これまで学科ごとに学んできた自分たちの専門性を提供しあうことで、学生の視野は徐々に開けていったと思います。

「地域においては多職種からなるチーム内での連携とともに、同じ地域のさまざまなチーム同士の連携が大切である」発表で学生たちはこの点を強調し、ご講評いただいたFiona Ross先生にも賛同していただきました。これも、現場で初めて学ぶことのできる貴重な実体験であったと言えるでしょう。

みんな達成感と開放感にあふれた表情です（ゼミの打ち上げの食事会にて）

## 高齢者の骨折の治療、再骨折予防と生活支援

髙橋学長・丸山・佐久間・星野ゼミ

我々のゼミでは、「高齢者の骨折について」をテーマとし、髙橋学長を含む4人のファシリテーターで活動しました。

検討モデルは自宅での転倒による大腿骨頸部骨折の高齢女性についてです。この女性は軽度認知症の夫と2人暮らしで、娘は少し離れた所に住んでいます。骨折するまでは、家事すべてをてきぱきとこなす活発な女性だったのですが、手術後はうつ状態になり、リハビリにも意欲がわきません。この事例の術後のリハビリテーションから退院後の在宅支援まで幅広く検討していきました。

学生ははじめ、自分の専門分野から意見を述べるだけでした。が、ディスカッションを重ねたことで、それだけでは連携が困難であることに気づきました。さらに、対象者を中心に考えて、各専門職間で支援目標を共有することが必要だと気づき、共通目標を「自立支援と再骨折予防」と設定しました。そして、身体機能やADLの評価、運動療法、食事療法、薬物療法、住宅環境、地域との交流、家族への支援などについて、アプローチ方法と連携方法を具体的に考えました。身体機能の維持については理学療法学科と看護学科が、運動療法については理学療法と健康スポーツ学科が、食事療法については健康栄養学科が、薬物療法では看護学科が、住宅環境については社会福祉学科、理学療法学科が、地域との交流、家族への支援については社会福祉学科、看護学科が中心となり多職種との連携を検討しました。

発表で学生は、多職種間のアプローチ方法、連携方法について具体的に述べました。また、連携すると「支援の幅が広がる。また、それぞれの職種の専門性の向上にもつながる」とまとめました。学生はゼミを通して連携の意義を十分学ぶことができました。この経験は、卒業後の専門職としての活躍の幅を広げることにつながっていくことでしょう。

「高齢者の骨折予防」グループは文字通り「骨太」の活動と発表ができました。

学長も含めディスカッション

発表風景

発表後の笑顔

## 地域の中で生きがいや希望のある生活

泉・吉岡・押木・福田・谷川・真柄ゼミ

私たちのゼミでは担当教員が実際に臨床で担当している脊髄小脳変性症患者さんについて検討を行いました。この疾患は進行性の疾患であり現在及び未来の問題点・アプローチ方法が必要となるため、広い視野を持つことが要求されます。そのため、学生に検討してもらうには正直、難易度が高いのではないかと考えました。しかし、ゼミが開始されると同時に、事前の「症例フォーマット」に記載されている以外の重要な点について、学生より多くの質問を受けました。また、学生間のディスカッションでは、それぞれの職種を活かした問題点の提示、アプローチ方法について述べていました。学生ならではの新しく柔軟な考えや、学生同士の壁のない討論が非常に良かったと思います。

学生が苦労した点としては、膨大な症例データの要点を絞ってまとめることでした。発表したいことはたくさんあるのですが、短い発表時間でどこを伝えたいかを熟考しました。この作業においても、目標は各学科同じ方向を向いたうえで、各学科のアプローチ方法を盛り込むことができ、とても完成度の高い発表ができたと思います。また、発表会においては教員からの鋭い質問に対しても的確に答えることができ、症例についての理解はかなりのものでした。

このゼミに参加することにより、学生のみならず教員においても連携の重要性が再認識されました。また、学生のうちに多職種連携を学んでおくことは患者さんやご家族により良いサービスを提供するのに非常に有用だと感じました。今後も総合ゼミを通して学生間、教員間、学生-教員間のさらなる連携強化を目指していきたいと思います。

義肢装具自立支援学科からは3年生が参加!

脊髄小脳変性症チームです!

気合いの発表会終了です!

# 学外実習体験記

本学では全学科が学外実習を行っています。今年度、実習に行って来た学生が日頃の学習内容を活かし、学外で学んできた実習の成果を報告してくれました。

## 臨床実習から得たもの

理学療法学科4年　小嶋 ちえみ

私は臨床実習Ⅲで、新潟県立六日町病院に10週間お世話になりました。実習では呼吸器疾患、中枢神経疾患、整形外科疾患などの患者さんに関らせて頂きました。今回の臨床実習では、これまで大学で学んできた知識を集大成するものであり、自分なりに万全の準備をして臨みました。しかしいざ実習が始まってみると、自分が思い描いていたように評価や治療が上手く行きませんでした。特に呼吸器疾患の方は、呼吸困難感が強く、歩くなど、体を動かすことに対して消極的な面がありました。呼吸困難感を解決するために、なぜ呼吸困難感が出現するのか、そのメカニズムはどのようなものなのか、生理学や運動学などの基礎に戻って再学習しました。そして患者さんに対してどのようなことに気をつける必要があるかを考えながら、治療プログラムの立案と実施をさせて頂きました。実習中は自分の知識不足や問題解決方法に戸惑うことがありましたが、実習指導者の先生方や、スタッフの方々からの温かいアドバイスを頂き、非常に収穫のある充実した実習を送ることができました。担当した患者さんはとても協力的な方だったので、だからこそ無理をして我慢をするようなことがないよう、リハビリ中だけでなく訓練前後の様子、病院での生活にも気遣うように配慮しました。そして日々の経過と共に、リハビリの時間を笑顔で迎えて頂けるようになり、治療以外の部分でもたくさんの喜びを感じることができました。臨床実習で改めて気づかされたことは、理学療法の専門知識だけではなく、大学の講義だけでは学ぶことのできないコミュニケーションの重要性や、患者さんと信頼関係を築くことの大切さを学びました。この実習で得た様々な視点で考える姿勢を大切に、これから理学療法士として働いていきたいと思っています。

## 評価実習で学んだこと

作業療法学科3年　井上 恵美

今回私は、精神障害分野と身体障害分野の二つの学外実習へ行ってきました。

初めての評価実習ということで、緊張し分からないことだらけでしたが、病院の先生方に厳しくも優しく様々なことを教えて頂き、机上では学ぶことができないたくさんのことを勉強させて頂きました。

実習前は、疾患の特徴を知ること、評価法を覚えることを重要視して勉強していたのですが、臨床では、ただ疾患だけをみるのでなく、患者様がこれから生きていく上で何をしたいのか、何を求めているのか、自分は作業療法士として患者様に何をすればいいのか、を考えることが大切であることを学びました。

たくさんの患者様と関わり、患者様からも多くのことを教えて頂きました。病室にいる時に「やる気が出ない」とおっしゃっていた患者様が、作業活動には生き生きと参加されている姿を見て、人間にとっての作業の必要性、重要性を感じました。また、患者様から教えて頂いた「患者は作業療法士から動作や作業を学ぶ。作業療法士は患者から病気とその人を学ぶ。互いを理解し、一緒に向上すべき。」という言葉は強く心に残り、今後作業療法士になる上で忘れてはならないと感じました。

学生のうちに短期間ではありますが、社会に飛び込んでいったということは良い経験になったと思います。責任感が必然的に求められ、この実習を経験したことで、以前に比べ落ち着いて物事を考えられるようになりました。

現場に出て、現場を肌で感じたことで、知識が足りず、視野を広げて色々な分野の知識を深めなくてはならないと感じましたが、今までぼんやりとしていた作業療法士像が明確となり、一層作業療法士になりたい、勉強したいという意欲が湧きました。

今後、この実習で学んだことを活かし、更に様々なことを積極的に学んでいきたいと考えています。

実習前みんなで頑張ろう!

## 評価実習を終えて

言語聴覚学科3年　加藤 愛理

9月の終わりから3週間、山形県にある鶴岡協立リハビリテーション病院で評価実習をさせていただきました。実習中は実家を離れ初めての一人暮らしだったので、最初はとてもさみしかったのですが、実習が始まるとさみしいと思う余裕もなく、一日一日があっという間に過ぎていきました。

実習では自分の知識不足を痛感することが多く、改めて言語聴覚士としてどのような視点で患者さんを観察し評価していけばよいか、実際に臨床の現場で学ぶことができました。例えば、新患の患者さんと初回にフリートークをした時、患者さんとコミュニケーションをとろうと私は必至だったのですが、バイザーの先生が目的を持って話すことが大切だとアドバイスしてくれました。フリートークから話のつじつまが合っているか、目線は合うかなど、様々な視点で患者さんをみることができると改めて気づかされました。

また患者さんとコミュニケーションをとる中で学ぶことも多くありました。お昼に摂食介助の様子を見学させていただいた時、私も実際に介助の体験をさせていただきました。患者さんからは、「もっと下の前に置いて」など具体的なアドバイスをいただき、最後には「上手くなったねっか」とほめてもらいました。たくさんの患者さんとお話をさせていただき、患者さん一人一人が先生だなと思いました。実習中はみなさんが本当に優しくて感謝の気持ちで一杯です。

今回の実習では患者さんの検査時の様子しか見られなかったので、病室での他の患者さんの様子など、検査以外の場面などでも見られたらよかったなと思いました。今後はさらに専門知識をつけ、一人前の言語聴覚士になれるよう多くの経験を積んでいきたいと思います。

この3週間、本当に貴重で有意義な日々でした。本当にありがとうございました。

## 初めての学外実習で学んだこと

義肢装具自立支援学科2年　青松 裕依

私の初めての学外実習では、義肢装具製作所の他に、福祉施設・用具関連の施設、医療施設でも行いました。

福祉機器・用具関連施設では高齢者疑似体験をしました。耳栓、メガネ、荷重ベスト、肘・膝サポーター、重り、手袋、を装着することで高齢者の機能低下を体感するというものです。杖がなければ身体が重く、視力の低下に加え平衡感覚が少しおかしくなって歩行が困難でした。高齢者疑似体験では高齢者の目線や不便さを認識し、さらに自分の身体が高齢化することへの恐怖も感じました。近年バリアフリー化が進んでいますが、これらの体験から社会全体ではまだまだ足りないのではないかと感じました。

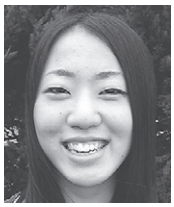
医療施設での実習では、病院の特徴を聞く他、様々な職種の方々に仕事内容、役割、他職種との連携についてのお話を伺いました。お話の中で最も印象に残ったのは、作業療法士の方の「装具のプロである義肢装具士と福祉用具のプロである作業療法士が協力して患者を支えることで、将来的に実生活における更なるQOLの向上を目指すことが可能である」といった言葉でした。大学での実習では装具の製作に重点をおいて考えがちになってしまいますが、適切な福祉用具と併用してこそ装具が生かされるといった場合もあり、改めて考えさせられました。

学外実習では、これまで学んだことがそれぞれの仕事にどのように関係しているかを深く学ぶことができました。また、何か質問をする時などに自分の言葉遣いの曖昧さを感じることがあり、言葉遣いもとても大切だということに気づかされました。

今回、医療現場で働く人々の生の声を頂き、義肢装具士という職業が近くになったようにも遠くになったようにも感じます。現在は、今だからこそできることを最大限にがんばりたいと思います。

## 臨地実習（保健所、公衆栄養学）での体験

健康栄養学科3年　田野 綾乃



私は10月に三条地域振興局（保健所）に隣地実習でお世話になりました。ここでは、保健所の栄養士さんに同行して体験した中から、主な3つについて書きます。

1. 食生活改善推進員の活動に参加－食生活改善推進員（食推さん）は、地域の健康は地域のみんなで支えあって守ろうという考えの基に組織された地域ボランティアです。具体的な活動としては、保育所や小学校で食育のための指人形劇を行ったり、男性のためのお料理教室を開いたりと、地域のおたすけマン的活動を行っています。今回は、各市町村にある食生活改善推進員会の代表が集まる報告・意見交換会に参加させて頂きました。

2. 学校給食センター巡回指導の見学－給食施設指導は、特定給食施設に対して、保健所栄養士が「栄養管理チェック票」を基に行う巡回指導を言います。この「チェック票」とは、施設の運営管理や栄養・食事管理、栄養教育や、品質・生産管理が法定通り行われているかを点検するためのもので、県で統一されています。保健所栄養士さんは、この「チェック票」を基に、施設側である学校栄養職員の方に聞き取りをしながら、施設の組織図、給与栄養目標量、献立表等の確認、指導や助言を行っていました。

3. 三条市市民公開講座「知って得する!糖尿病」への参加－展示・体験コーナーとして、栄養士会の皆様が作った1600kcalの食事や献立レシピ、お薬相談コーナー、血糖や血圧、動脈硬化度の測定コーナーがありました。そしてなんと!展示コーナーには私たちが作成した『栄養成分表示の見方についてのポスター』を展示して頂きました。住民の方々のお役に立てて、とっても嬉しかったです!!

保健所の栄養士さんは、地域の子どもからお年よりまで全ての方々の健康づくりのために、多くの取り組みをしていると改めて実感しました!

## 教育実習の意味

健康スポーツ学科4年　春川 祐輔

教育実習は3週間という短い間でしたが、とても多くを学ぶことができました。授業はもちろんのこと、体育祭やその準備などの行事や部活動、1日を通した生徒との交流、学校運営に必要な裏方の仕事などを、間近で見て体験することで教師の大変さを感じました。

実習の授業では、最初何もできず、準備と授業のシミュレーションをすることの大切さを痛感しました。その中でも実習を通して特に感じたことは、①教材研究は実際に自分で体験する②どう集団を動かすか③言葉や行動のメリハリの重要性です。生徒の能力にはそれぞればらつきがある上に、教師自身が容易に出来ても生徒は出来ないかもしれないため、多くの生徒が出来るかという観点をしっかりと持たなければなりません。また、授業は必ず集団であり、その集団を動かすためにはメリハリのある声掛けや行動が必要となります。これらは授業が成立するためには必要なこととなっていきます。

授業外では部活動や体育祭に携わることができました。部活動は野球部に参加させていただきましたが、大会前の緊張感のある練習や練習試合を、先輩としてではなく教師の目線でお手伝いをすることができました。また、体育祭はグラウンドの準備を体育科が行い、当日も運営をしていましたが、影のサポートを体育科の先生方がしており、先生方の体育祭への力の入れかたにとても衝撃を受けました。このように授業だけでない様々な面を見ることができたことは大きな財産となりました。

今回の実習を通して、以前よりも教師になりたい気持ちが増しました。先生方から教師の心得を学び、生徒と触れ合うことで様々なことを感じました。教育実習の本当の意味はこういったことだったのではないかと思います。この気持ちと実習での経験を大切に将来教師として努力していきたいです。

失敗を恐れずにがむしゃらに!

## 病院実習で学んだ看護師として大切なもの

看護学科3年　太田 亜紀

私たち看護学科3年生は、9月から2月までの期間で学外実習が行われます。3週間の急性期の実習では記録などに時間がかかり、睡眠時間が削られる毎日でしたが、友人や先生などたくさんの人に支えられ充実した実習を行うことができました。

急性期での実習で受け持たせていただいた患者さんに、「看護師さんは、胸の音を聞いたりしていくけど、患者の不安なんて考えたり・わかったりしてくれない。あなたは今のままでいてください。」といわれました。この言葉を聞いたとき、看護とはただ病気をみたり点滴などの技術を提供することだけではなく、基本となるのは患者さんを一人の人間としてみてかかわり、患者の心を大切にするということだと再確認することができました。この実習で、看護には「相手の気持ちを受け取る感性」が必要だということを学ぶことができました。

この実習では特に、看護とは何かという基本的な事について考えることができました。基本的な看護技術はもちろんですが、患者さんを尊厳のある人間としてかかわり、患者さんの気持ちを考えられるということが大切だということを学ぶことができました。これからの実習ではこのことを忘れずに、一人の患者さんと長い時間を過ごすことのできる学生のうちに、患者さんとの時間を大切にし、患者さんの気持ちに少しでも近づけるように頑張っていきたいです。

看護の基本を患者さんから教わりました

## 多くを学んだ現場実習

社会福祉学科3年　岡崎 真衣

私は3年次の本実習で病院に行きました。実習では、医療ソーシャルワーカー（以下MSW）の方に付かせていただき、業務内容や病院での役割など学校では学べないことを実際に見て学ぶことができました。中でも面接を傾聴出来たことはとても印象的で、今回は腰部脊柱管狭窄症の患者さんの話を聞くことができました。この患者さんは①一人暮らしなので買い物するのに不安がある②住民票が新潟ではない県にあるが新潟でサービスを受けられるのかという問題がありました。まずMSWの方は、患者さんの基本的な情報を各方面より集め、現在の状況とキーパーソンが誰になるのかを調べていました。その後、この患者さんに必要となる制度やサービスをまとめて患者さんに一つ一つ丁寧に分かりやすく説明していました。問題を解決するために必要な制度やサービスは①には介護保険を申請しホームヘルパーを頼む②には住民票を新潟に移さないと介護保険を利用出来ないので住民票を移す、ということがこの患者さんへの支援方法でした。患者さんも問題が解決できるととても喜んでいましたが、MSWの方はまだ自分には言えない悩みがあることを感じとっていました。だからといって無理に悩みを聞きだすのではなく「この人なら話をしてもいい」と思ってもらえるように働きかけていくことが大切だと教えていただきました。今回の実習を通して、MSWは患者さんのことを一番に考えプライバシーに配慮し丁寧な対応が求められる仕事だと感じました。また患者さんだけでなく、病院内のスタッフにも信頼してもらうことが必要で、MSWには「信頼関係」と「連携」が最も大切なものだと学びました。実習はとても大変で自分の勉強不足を痛感しましたが、自分が何を分かっていなかったのかを改めて気づかされ、とてもいい経験になりました。

# 世界へ羽ばたく選手を育成する強化クラブ紹介

本学では、サッカー・バスケットボール・水泳・陸上の4競技を強化クラブに指定し、トップアスリートの育成を目標に競技力の向上と、人間性の向上を目指して日々トレーニングに励んでいます。今回はその各強化クラブの最近の活躍についてご紹介します。

## サッカー部（男子チーム・女子部員）

### 男子2年連続インカレ出場。女子部員U-20ワールドカップ出場権獲得!

平成17年度に発足した男子チームは、多くの方々に支えていただき、昨年度は創部4年目にして念願の全日本大学サッカー選手権大会（全国9地域・計16代表）に出場し、本年度も同大会に2年連続2回目の出場を果たすことができました。

女子部員では、波佐谷灯子・川村優理・小原由梨愛・斉藤友里・山崎円美の5名がアルビレックス新潟レディースの一員として、多くのサポーターと共に「なでしこリーグ」でプレーしています。小原・山崎はU-19日本女子代表として中国で開催されたアジア大会を制覇。来年ドイツで開催されるU-20女子ワールドカップ出場権獲得に貢献しました。また、波佐谷・川村・小原は新潟県代表として「トキめき新潟国体」において見事準優勝を果たしました。

●2009年度主な戦歴

| | 大会名 | 成績（回数または所属） | 選手名 |
|---|---|---|---|
| 男子チーム | 新潟県大学・高専春季リーグ | 優勝（4年連続） | |
| | 第37回北信越大学サッカーリーグ | 優勝（2年連続） | |
| | 第58回全日本大学サッカー選手権大会 | 2年連続2回目出場 | |
| 女子部員 | なでしこリーグ1部 | 7位（アルビレックス新潟L） | |
| | AFC U-19女子選手権 中国2009 | 優勝（U-19日本女子代表） | 小原・山崎 |
| | トキめき新潟国体 | 準優勝（女子新潟県代表） | 波佐谷・川村・小原 |

## 男女バスケットボール部

### 女子4年連続インカレ出場。男子リーグ戦2部全勝優勝、1部昇格!

男女バスケットボール部は強化クラブとして発足当初から県内外のバスケットボールファン、関係者に注目されながら各種大会で上位入賞してきました。

2009年度、男子バスケットボール部は北信越学生春季リーグ戦において2部で全勝優勝し、1部に昇格しました。女子バスケットボール部は春季リーグ戦において1部で2年連続全勝優勝し、北信越学生バスケットボール選手権兼インカレ予選では3年連続で全勝優勝し4年連続インカレ出場を果たしました。

また、女子はインカレで初戦愛知学泉大（インカレ準優勝）に善戦しましたが、残念ながら初戦突破はできませんでした。来年度は男女でインカレ出場し、男女とも初戦突破を目標に頑張ります。

2009年度も男女とも県内外から強力な新戦力となる1年生が入学しました。練習内容もさらにレベルアップし毎日明るく、楽しく、厳しく練習に取り組んでいます。

●2009年度主な戦歴

| | 大会名 | 成績（回数または所属） |
|---|---|---|
| 男子 | 北信越学生春季リーグ戦 | 2部優勝1部昇格 |
| | H21年度甲信越学生バスケットボール選手権 | 優勝（2年連続優勝） |
| | H21年度新潟県バスケットボール選手権 | 準優勝 |
| 女子 | 北信越学生春季リーグ戦 | 1部優勝（2年連続優勝） |
| | H21年度甲信越学生バスケットボール選手権 | 優勝（初優勝） |
| | 北信越学生バスケットボール選手権大会 | 優勝（3年連続優勝、4年連続インカレ出場） |

## 水泳部

### 男子関東学生選手権、1部昇格!

2009年度、水泳部は創部5年目をむかえ、女子が関東学生選手権1部総合5位、男子が同大会2部で総合2位となり、男子がついに1部昇格を決めました。個人では、郡山奈々が日本学生選手権800m自由形で5位入賞を果たしました。また、国民体育大会や全国障害者スポーツ大会の大会サポート、中国黒龍江省水泳チームとの合同練習など、

「水泳」を通じ「競技」だけでなく「ボランティア活動」や「国際交流」も行なってきました。今年度も「認めあい、支えあい、競いあうチーム」「多くの人から応援されるチーム」という2つのスローガンを掲げ、チーム一丸となって努力していこうと思います。

●2009年度主な戦歴

| 大会名 | 成績（回数または所属） | 選手名 |
|---|---|---|
| 関東学生選手権水泳競技大会 | 女子1部総合5位 | |
| 関東学生選手権水泳競技大会 | 男子2部総合2位（1部昇格） | |
| 日本学生選手権 | 800m自由形5位 | 郡山奈々 |
| 国民体育大会競泳競技 | 成年男子200mリレー 2位 | 駒形進［新潟県代表］ |
| 国民体育大会競泳競技 | 成年女子400mメドレーリレー 6位 | 奈良梨央［新潟県代表］ |
| 湘南オープンウォーター大会 | 10kmの部 2位 | 井口絵里加 |

## 陸上競技部

### 2年連続全日本インカレ入賞!

陸上競技部は昨年に続き日本学生陸上対校選手権大会で入賞者を出し、全日本大学駅伝選手権大会予選会でも男女総合3位、そして出雲全日本大学選抜駅伝や全日本大学女子選抜駅伝のメンバーを出すことができました。創部5年目という新しい部ですが、全国レベルで活躍できる選手を輩出できるようになりました。また選手個々の目標の達成だけでなく、指導者として選手を指導できる知力と指導力を身につけることを目標にしている為、きめ細やかな指導ができるよう指導スタッフを充実させ、部長、監督をはじめ、短距離・跳躍等のコーチや中長距離のコーチ、アドバイザースタッフなどを配置し、協力して選手指導にあたっています。

●2009年度主な戦歴

| 大会名 | 成績（回数または所属） | 選手名 |
|---|---|---|
| 日本学生陸上競技対校選手権大会 | 男子円盤投げ 6位 | 土田祥太 |
| 北信越学生陸上競技対校選手権大会 | 男子円盤投げ 優勝（北信越学生新記録） | 土田祥太 |
| 北陸陸上競技選手権大会 | 男子円盤投げ 優勝 | 土田祥太 |
| 北信越学生陸上競技対校選手権大会 | 男子5000m 優勝 | 中澤翔 |
| 新潟県陸上競技選手権大会 | 男子3000mS.C. 優勝 | 杉坂侑磨 |
| 北信越学生陸上競技選手権大会 | 女子100mH 優勝 | 桑野沙紀 |
| 北信越学生陸上競技選手権大会 | 女子やり投げ 優勝 | 小林梨奈 |
| 北信越学生ロードレース大会 | 男子団体 3位 | 新潟医療福祉大学 |
| 北信越学生ロードレース大会 | 女子団体 3位 | 新潟医療福祉大学 |
| 出雲全日本大学選抜駅伝 北信越学連選抜チーム選出 | | 中澤翔・牛木陽一 |
| 全日本大学女子選抜駅伝 北信越学連選抜チーム選出 | | 堀内曜子・柴澤真南美 |

## JICAの要請による生活習慣病予防に関する研修を実施しました

10月15日㈭～11月13日㈮までの約1ヵ月間、本学では独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の要請を受け、フィージー・バヌアツ・ソロモン・マーシャルの大洋州4カ国から研修生8名を受け入れ、生活習慣病予防に関する研修を実施致しました。

近年、大洋州地域では生活習慣病による疾病・死亡率増加が著しく、生活習慣病予防における知識・技術を獲得し自国で普及することができる人材育成が急務とされています。

本学では、健康栄養学科をはじめ、看護学科、健康スポーツ学科、社会福祉学科など、3学部8学科を有する総合大学であり、また健康栄養学科　村山教授が2008年～2009年の2回にわたりフィージー国を対象とした「栄養政策支援プロジェクト」に参加した経緯などが高く評価され、JICAより生活習慣病予防の人材育成に向けた研修受け入れ先として最適であると判断されました。

研修内容は技術研修プログラムが中心で、生活習慣病対策に関する講義から、本学スポーツ施設を利用した体力測定や体験、栄養プログラムの作成など、本学の多くの教員が担当する実践的な内容を実施しました。さらに新潟県内のいくつかの病院保健施設にもご協力いただき、各自の健康度チェックを行ったり、手術現場の様子や4ヶ月児検診を見学させていただくなど、日本における保健医療の現場を体験することもでき、研修生にとっては大変有意義な研修となったようです。またJICAからも、他では講義形式の研修が多い中、実践的な研修で大変良く、研修生の満足度も高いと好評をいただくことができました。

本研修はJICAからの3年間の受託のため、また来年度以降もより充実した内容を企画し、本学の特色を活かした国際貢献を行っていきたいと思います。

## 新潟県公立学校教員に2名現役合格!

新潟医療福祉大学教職課程では、平成22年度採用の新潟県公立学校教員採用選考において、本学健康スポーツ学科から2名の現役合格者（中学校・保健体育）を出すことができました。

公立学校の教員になるためには、教職に関する科目や専門科目、教育実習などの指定科目を履修し、4年次に行われる各都道府県や政令市の教員採用選考を受検して、合格する必要があります。

以下、合格した学生の紹介です。

加藤翠さん（健康スポーツ学科4年）は、本学の強化指定クラブである水泳部に所属しており、水泳部の厳しい練習や、地域の小学校で学習ボランティアとして水泳を教えるなどの活動の合間を縫って、こつこつと努力し、合格を勝ち取ることができました。

飯田康紀さん（健康スポーツ学科4年）は、軟式野球部に所属しており、キャプテンとして積極的に部活に参加しながら、教員採用試験の準備を早めにスタートさせ、最後まで努力し続けた成果が出ました。

教員採用試験は大変な難関でありますが、本学では合格者を輩出できるように計画的な準備をし、通年にわたる学内模擬試験や教員主催の学習会、学生有志による勉強会、教員採用試験予備校の模擬試験や学内での講座などにより万全のサポートを行っております。

本学ではこれからも、より多くの学生が試験に合格できるよう支援を続けていきます。

## 保護者会を開催

11月7日㈯、本学にて平成21年度保護者会が開催されました。

保護者会は本学在学の1年生から4年生全ての保護者の方を対象に実施され、保護者の皆様に本学の教育方針や指導体制、学生の修学状況や生活状況、就職活動状況などを説明して、本学の取り組みを理解してもらうとともに、懇談会・個人面談等を通して情報交換・親睦を深めることを目的として、毎年開催されています。

当日は400名を超える多数の保護者の方が出席され、会場は終日熱気に包まれておりました。

保護者会冒頭では、髙橋学長より、本学における重点的な取り組みについての全体説明が行われ、その後、学生代表グループよりこれまで学内外で修得した専門知識・技術の発表が行われました。

お昼休憩を挟んだ午後からは、各学科別に分かれて、教員から具体的な学科の取り組み状況について説明が行われ、その後、懇談会や個人面談が実施されました。いずれの学科でも、学生の生活に関する質問が多く、率直な意見が交わされました。

会終了後、保護者の皆様からは「地域の方や保護者の意見を、大学運営に素早く対応させている所は大変素晴らしいと思います」「卒業や就職のことで活発な意見交流があり、同じ志を持つ子どもの親として、共通の悩みがあることが分かった」などの意見を頂き、保護者の皆様の教育への熱意、また本学への期待を改めて感じることのできる機会となりました。（平成21年度保護者会アンケートより抜粋）

本学では、今回の保護者会にて頂戴したアンケート内容をよく検討し、本学の教育・研究活動に反映するとともに、今後も保護者の皆様との連携を大切にしてまいります。

# 伍桃祭を終えて

## 第9回伍桃祭（大学祭）報告

今年の伍桃祭のテーマである、「SMILE～笑う門には福来たる～」には、不況と呼ばれるこの時代に、みなさんに笑顔で幸せになってもらおうという意味が込められていました。そこで、社会全体で笑顔になるために、今年は地域との交流を意識した伍桃祭を企画しました。

地域交流のイベントとしては、フリーマーケットや近隣の小中学校の吹奏楽部による演奏、各種団体による出店、小中学生と本学学生によるスポーツ交流などを行い、より多くの地域のみなさまに様々なかたちで関わっていただくことができ、大変好評でしたので、これらは今後、更に発展していき、来年度以降もより地域密着型の大学祭になっていってほしいと思いました。

また、テーマに合わせて笑顔になれるイベントを多く取り入れました。よしもと芸人による「おでかけ LOTS the よしもと」や、8学科それぞれの学科パフォーマンス、SMILEアワーと称した学科対抗イベントは、非常に大きな盛り上がりを見せ、多くの来場者の方に楽しんでいただけました。

最後になりましたが、無事伍桃祭を終えることができたのも、学生や教職員の方々をはじめ、地域の方々や企業の方々など、多くの方にご協力をしていただいたおかげです。何よりも、一緒に企画・運営をしてくれた学友会・伍桃祭実行委員に感謝致します。本当にありがとうございました。

伍桃祭実行委員長　桐 山　　渉

# 受験生のみなさんへ

## 2010年4月 医療経営管理学部 医療情報管理学科 新設!!

少子高齢化の進展や医師不足の問題など、転換期を迎える日本の医療において、医師の負担軽減を目的とした「メディカルクラーク（医療秘書・事務職）」や、質の高い医療サービスの提供に向けた「医療情報のスペシャリスト」が強く求められています。

医療情報管理学科では、こうした社会のニーズに対応すべく「医療事務・秘書分野」「医療情報分野」「医療経営分野」の3つ分野について、専門的に学ぶ様々な科目を配置し、医療現場のニーズに対応できるスペシャリストを育成します。また、学生は分野を越えて自由に科目を選択することができるため、卒業後は医療・福祉機関はもちろん、情報サービス企業など「医療」「情報」「経営」に関するあらゆるフィールドでの活躍が期待できます。

| 医療事務・秘書分野 | 医療情報分野 | 医療経営分野 |
|---|---|---|
| 接遇・会計などの事務・秘書に関する知識と技術 | 情報処理やプログラムに関する知識と技術 | 経営戦略や人事管理などの知識と技術 |

＋

基礎医学・診療報酬請求・電子カルテ・病院組織など医療に関する高度な知識と技術

就職に強い確かな資格取得

| | | |
|---|---|---|
| ●メディカルクラーク<br>●診療情報管理士 | ●医療情報技師<br>●基本情報技術者 | ●日商簿記 |

医療機関はもちろん、保険・福祉施設、医療システム関連企業、IT関連企業、一般企業まで幅広いフィールドで活躍

## イベント案内

### 春のオープンキャンパス3月27日㈯

新3年生に向けて、「大学概要・入試概要説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「全学科を全て体験できるコーナー」など様々なプログラムを用意しています。また、保健・医療・福祉分野の仕事内容や資格、養成校の最新情報、大学と専門学校の違いなど、みなさんの進路選択に役立つ情報が満載の「進学総合ガイダンス」など春のオープンキャンパス限定のプログラムを計画しています。

## 入試案内

### ■一般入学選考試験（前期日程・後期日程）

- **「第2志願制度」でさらに入学へのチャンスが広がります！**
  ※理学療法学科、看護学科を第2志願とすることはできません。
- **前期日程では全国7都市に試験会場を設置！ 後期日程も郡山会場を新たに追加！**
  **（前期日程会場:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡）（後期日程会場:新潟・東京・郡山）**
- **センター試験利用入試との併願も可能！**
  ※医療情報管理学科ではセンター試験利用入試を実施いたしません。
- **前期日程での成績優秀者は、「特待生制度」により1年次の授業料全額免除！**

■募集人員

| 学　　科 | 募集人員 | |
|---|---|---|
| | 前期 | 後期 |
| 理学療法学科 | 30名 | 4名 |
| 作業療法学科 | 17名 | 2名 |
| 言語聴覚学科 | 15名 | 2名 |
| 義肢装具自立支援学科 | 14名 | 2名 |
| 健康栄養学科 | 15名 | 2名 |
| 健康スポーツ学科 | 22名 | 2名 |
| 看護学科 | 32名 | 3名 |
| 社会福祉学科 | 35名 | 3名 |
| 医療情報管理学科 | 20名 | 3名 |

■入学選考試験日程

| 入試区分 | 出願期間 | 試験日 |
|---|---|---|
| 一般前期 | 1/6㈬～1/22㈮ | 2/2㈫ |
| 一般後期 | 2/8㈪～2/19㈮ | 3/2㈫ |

※大学入試センター試験利用入試（前期日程・後期日程）も実施します。詳細につきましては入試事務室（☎025-257-4459）までお問い合わせください。

新潟医療福祉大学

〒950-3198　新潟市北区島見町 1398 番地　TEL025-257-4455㈹　FAX025-257-4456
URL　http://www.nuhw.ac.jp/　携帯サイト　http://www.nuhw.jp/m/
【入試事務室】TEL025-257-4459　E-mail　nyuusi@nuhw.ac.jp

誌名「QOLサポーター新潟」の由来　世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっております。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する（サポート）人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様に本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。